

1 派遣期日 平成29年 9月17日(日)

2 研修先 学校名(会場名) 筑波大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
電話番号 03-3946-1391
ホームページ <http://www.udjapan.org/> (日本UD学会)

3 研修内容

○日本授業UD学会 第3回全国大会

テーマ「主体的・対話的で深い学び」と授業UD

選択型講演 国語授業のUD

ー全員が楽しく学び合い「わかる・できる」国語授業づくりー

講師：桂 聖 先生

◎国語授業のUD(ユニバーサルデザイン)のイメージ

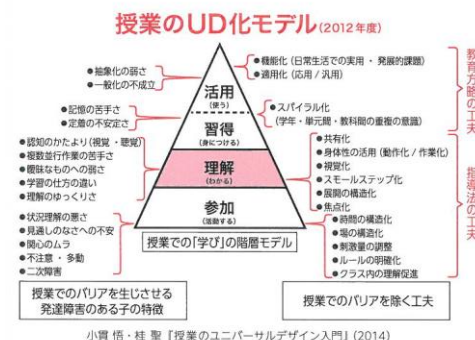
特別支援教育の視点を取り入れる

理解が遅れがちな、気になるAさんへの配慮・工夫
算数は得意だけど、国語は苦手なBさん

↓
理解力が優れるCさん

全員が楽しく「わかる・できる」授業づくりを目指す

- ・UDとは「誰にでも通じるもの」であるため、どのクラスにもいる発達障害の可能性のある子を想定すること。
- ・参加、理解、習得、活用の4段階があり、参加は学習環境や学級づくり、その上に理解のUDがあり、習得や活用(身につく)、実生活にも使えるというのが最終的な目的である。



【1】国語授業UDのバージョン1…「論理」を授業の目標にする。

① 焦点化(シンプル)

- ・授業のねらいや活動をしぼること。

(例) 心情の読み取り方を学ばせたい。→○○はどんな子？

- ・行動→抽象化
- ・どの表現に注目するか
- ・全体像の中での主人公について

解釈の仕方
を深める

曖昧にせずやり方をはっきりさせることで、次時の物語の読み取りにつながる。

② 視覚化(ビジュアル)

- ・視覚的な手がかりを活用すること。
- ・効果的な視覚化かどうか、ねらいに通じているかを吟味すること。

③ 共有化(シェア)

- ・話し合い活動を組織化すること。

(例) ペア学習にて一人の意見をもう一度他の子に説明する。

子と先生でやりとりをする。(先生が理解の難しい子の役をして説明させる。)

【2】国語授業 UD のバージョン2…教材に10のしかけをする。

- ① 順序をかえる ② 選択肢をつくる ③ 置き換える ④ 隠す ⑤ 加える ⑥ 限定する
⑦ 分類する ⑧ 図解する ⑨ 配置する ⑩ 仮定する

ただ教科書を読んで、「この気持ちはどうか」「気持ちはどこで変わったか」と発問していても子どもたちは主体的には動かない授業になりやすい。課題を共有化し、さらに理解を共有化するためにも、子どもたちが動き始めるきっかけとなるしかけは非常に有効な手立てとなる。

【3】国語授業 UD のバージョン3…国語的態度を育成する。

「評価読み」から入って、確認、解釈してまた評価をする授業のこと。始めに選んだ作品のよさ（評価）について、「どんなところが面白いかな」を感覚的に捉えたうえで、友達と交流する中で仕組みの面白さを再発見していくようにする。

① 主体性

- ・ 選択や決定の場面をつくること。→何かを「きめる」「選ぶ」ことで授業が他人事ではなく、自分事になっていくことにつながる。
- ・ 揺さぶり発問を入れて、意欲や思考の活性化を図ること。

② 多様性

- ・ 最初の評価読みについて、着眼点を子どもに委ねながら内容を確認したり解釈したりして評価読みをし直していくこと。評価の理由付けをすることで物語の読む力が高まる。

③ 協同性

- ・ それぞれの子どもがもった素朴な感想や多様な考えの違いを聞き合い、学び合い、問題を解決していくこと。

【4】指導の工夫と個別の配慮

指導の工夫をしても、それでもものれない子には、個別の配慮が必要になる。

- ・ 間違い探し → チラ見をしてもいいという安心感
- ・ 音読 → ふりがな付き、一行ずつのプリントの配布
- ・ ペア学習 → 教師が調整役になる
- ・ 全体の話し合い活動 → 励ます、つぶやきを拾う
- ・ ノートに書く → 書き出しの指示、丸写しも許可

恥をかかせず、さりげなく、自己選択できるようにすることが大切であるが、あくまでも「授業の質の高さ」が大前提である。

【5】「授業のユニバーサルデザイン」が目指すこと

- ① 従来の「わかる・できる授業」を気になる A さん側から本気で考えること。
② 活動や内容のレベルを低くするのではなく、より本質的にすること。
③ 特別なことではなくて、当たり前のことをていねいにすること。

4 感想

児童の実態を的確に把握し、どの子にもわかるために、しかけを構想して授業を組み立てることがユニバーサルデザイン化には大切であり、全員参加の授業づくりにつながっていくことがわかった。「授業は、正解を発表し合うことではない。困ったことやわからないことを出し合って、みんなで解決していくことが授業である。」と桂先生がおっしゃっていたが、苦手な子の存在が「主体的・対話的で深い学び」を実現する鍵になるということを意識して、研修したことを生かし、日々の授業を充実させていきたい。